

風の又三郎

宮沢賢治



どつどど　どどうど　どどうど　どどう

青いくるみも吹きとばせ

すっぱいかりんも吹きとばせ

どつどど　どどうど　どどうど　どどう

谷川の岸に小さな学校がありました。

教室はたった一つでしたが生徒は三年生がないだけで、あとは一年から六年までみんなありました。運動場もテニスコートのくらいでしたが、すぐうしろは栗くりの木のあきれいな草の山でしたし、運動場のすみにはごぼごぼつめたい水を噴ふく岩穴もあつたのです。

さわやかな九月一日の朝でした。青ぞらで風がどうと鳴り、日光は運動場いっぱいでした。黒い雪袴ゆきばかまをはいた二人の一年生

の子がどてをまわつて運動場にはいつて来て、まだほかにだれも来ていないのを見て、「ほう、おら一等だぞ。一等だぞ。」とかわるがわる叫びながら大よろこびで門をはいつて来たのでしたが、ちよつと教室の中を見ますと、二人^{ふたり}ともまるでびっくりして棒立ちになり、それから顔を見合わせてぶるぶるふるえましましたが、ひとりはどうとう泣き出してしまいました。というわけは、そのしんとした朝の教室のなかにどこから来たのか、まるで顔も知らないおかしな赤い髪の子供がひとり、いちばん前の机にちやんとすわっていたのです。そしてその机といたらまったくこの泣いた子の自分の机だったのです。

もひとりの子ももう半分泣きかけていましたが、それでもむりやり目をりんと張つて、そつちのほうをにらめていましたら、ちようどそのとき、川上から、

「ちようはあ かぐり ちようはあ かぐり。」と高く叫ぶ声かかえてわらつて運動場へかけて来ました。と思つたらすぐそのあとから佐太郎さたろうだの耕助こうすけだのどやどややつてきました。

「なして泣いでら、うなかもたのが。」嘉助が泣かないこどもの肩をつかまえて言いました。するとその子もわあと泣いてしまいました。おかしいとおもつてみんながあたりを見ると、教室の中にあの赤毛のおかしな子がすまして、しゃんとすわつているのが目につきました。

みんなはしんとなつてしまいました。だんだんみんな女の子たちも集まつて来ましたが、だれもなんとも言えませんでした。

赤毛の子どもはいつこうこわがるふうもなくやつぱりちゃんいちろうとすわつて、じつと黒板を見ています。すると六年生の一いちろう郎が

来ました。一郎はまるでおとなのようにゆっくり大またにやつてきて、みんなを見て、

「何なにした。」とききました。

みんなははじめてがやがや声をたててその教室の中の変な子を指さしました。一郎はしばらくそつちを見ていましたが、やがて鞆かばんをすっかりかかえて、さつさと窓の下へ行きました。

みんなもすっかり元気になってついて行きました。

「だれだ、時間にならないに教室へはいつてるのは。」一郎は窓へはいのぼつて教室の中へ顔をつき出して言いました。

「お天気の良い時教室さはいつてるけど先生にうんとしからえるぞ。」窓の下の耕助が言いました。

「しからえでもおら知らないよ。」嘉助が言いました。

「早く出はつて来、出はつて来。」一郎が言いました。けれども

そのこどもはきよろきよろ室の中やみんなのほうを見るばかりで、やっぱりちゃんとひざに手をおいて腰掛けにすわっていました。

ぜんたいその形からが実におかしいのでした。変てこなねずみいろのだぶだぶの上着を着て、白い半ずぼんをはいて、それに赤い革かわの半靴はんぐつをはいていたのです。

それに顔といったらまるで熟したりんごのよう、ことに目はまん丸でまつくろなのでした。いつこう言葉が通じないようなので一郎も全く困ってしまいました。

「あいづは外国人だな。」

「学校さはいるのだな。」みんなはがやがやがやがや言いまして。ところが五年生の嘉助がいきなり、

「ああ三年生さはいるのだ。」と叫びましたので、

「ああそうだ。」と小さいこどもらは思いましたが、一郎はだまつてくびをまげました。

変なこどもはやはりきよろきよろこつちを見るだけ、きちんと腰掛けています。

そのとき風がどうと吹いて来て教室のガラス戸はみんながたがた鳴り、学校のうしろの山の萱かやや栗くりの木はみんな変に青じろくなつてゆれ、教室のなかのこどもはなんだかにやつとわらつてすこしうごいたようでした。

すると嘉助がすぐ叫びました。

「ああわかった。あいつは風の又三郎またさぶろうだぞ。」

そうだとみんなもおもつたとき、にわかになうしろのほうで五郎が、

「わあ、痛いぢやあ。」と叫びました。

みんなそつちへ振り向きますと、五郎が耕助に足のゆびをふまれて、まるでおこつて耕助をなぐりつけていたのです。すると耕助もおこつて、

「わあ、われ悪くてでひと撲はたいだなあ。」と言つてまた五郎をなぐろうとしました。

五郎はまるで顔じゆう涙だらけにして耕助に組み付こうとしました。そこで一郎が間へはいつて嘉助が耕助を押えてしまいました。

「わあい、けんかするなつたら、先生あちゃんと職員室に来てらぞ。」と一郎が言いながらまた教室のほうを見ましたら、一郎はにわかにもまるでぼかんとしてしまいました。

たつたいままで教室にいたあの変な子が影もかたちもないのです。みんなもまるでせつかく友だちになつた子うまが遠くへ

やられたよう、せつかく捕とつた山雀やまがらに逃げられたように思いました。

風がまたどうと吹いて来て窓ガラスをがたがた言わせ、うしろの山の萱かやをだんだん上流のほうへ青じろく波だてて行きました。

「わあ、うなだけんかしたんだがら又三郎いなくなつたな。」嘉助がおこつて言いました。

みんなもほんとうにそう思いました。五郎はじつに申しわけないと思つて、足の痛いのも忘れてしょんぼり肩をすぼめて立つたのです。

「やつぱりあいつは風の又三郎だつたな。」

「二百十日で来たのだな。」

「靴くつはいでだたぞ。」

「服も着でだたぞ。」

「髪赤くておかしやぶづだったな。」

「ありやありや、又三郎おれの机の上さ石かけ乗せでつたぞ。」
二年生の子が言いました。見るとその子の机の上にはきたない石かけが乗っていたのです。

「そうだ、ありや。あそこのガラスもぶつかしたぞ。」

「そでないであ。あいづあ休み前に嘉助石ぶつつけたのだな。」

「わあい。そでないであ。」と言っていたとき、これはまたなんというわけでしょう。先生が玄関から出て来たのです。先生はぴかぴか光る呼び子を右手にもって、もう集まれのしたくをしているのでしたが、そのすぐうしろから、さっきの赤い髪の子が、まるで権現ごんげんさまの尾おつば持ちのようになすまし込んで、白いシャツポをかぶって、先生についてすばすばとあるいて来たの

です。

みんなはしいんとなつてしまいました。やつと一郎が「先生お早うございます。」と言いましたのでみんなもついて、

「先生お早うございます。」と言っただけでした。

「みなさん。お早う。どなたも元気ですね。では並んで。」先生は呼び子をビルルと吹きました。それはすぐ谷の向こうの山へひびいてまたビルルと低く戻もどつてきました。

すっかりやすみの前のおりだとみんなが思いながら六年生は一人、五年生は七人、四年生は六人、一二年生は十二人、組ごとに一列に縦にならびました。

二年は八人、一年生は四人前へならえをしてならんだのです。するとその間あのおかしな子は、何かおかしいのかおもしろいのか奥歯で横つちよに舌をかむようにして、じろじろみんな

を見ながら先生のうしろに立っていたのです。すると先生は、高田^{たかだ}さんこつちへおはいりなさいと言いながら五年生の列のところへ連れて行って、丈^{たけ}を嘉助とくらべてから嘉助とそうしろのきよの間へ立たせました。

みんなはふりかえってじつとそれを見ていました。

先生はまた玄関の前に戻って、

「前へならえ。」と号令をかけました。

みんなはもう一ぺん前へならえをしてすっかり列をつくりましたが、じつはあの変な子がどういうふうになっているのか見たくて、かわるがわるそつちをふりむいたり横目でにらんだりしたのでした。するとその子はちゃんと前へならえでもなんでも知ってるらしく平気で両腕を前へ出して、指さきを嘉助のせなかへやつと届くくらいにしていたものですから、嘉助はなんだ

かせなかがかゆく、くすぐつたいというふうにもじもじしていました。

「直れ。」先生がまた号令をかけました。

「一年から順に前へおい。」そこで一年生はあるき出し、まもなく二年生もあるき出してみんなの前をぐるつと通つて、右手の下駄箱げたばこのある入り口にはいつて行きました。四年生があるき出すときの子も嘉助のあとへついて大威張りであるいて行きました。前へ行った子もときどきふりかえつて見、あとの者もじつと見ていたのです。

まもなくみんなははきものを下駄箱げたばこに入れて教室へはいつて、ちやうど外へならんだときのように組ごとに一列に机にすわりました。さつきの子もすまし込んで嘉助のうしろにすわりました。ところがもう大きすぎです。

「わあ、おらの机さ石かけはいつてるぞ。」

「わあ、おらの机代わってるぞ。」

「キッコ、キッコ、うな通信簿持つて来たが。おら忘れで来たぢやあ。」

「わあい、さの、木ペン借せ、木ペン借せたら。」

「わあがない。ひとの雑記帳とつてつて。」

そのとき先生がはいつて来ましたのでみんなもさわぎながらとにかく立ちあがり、一郎がいちばんうしろで、

「礼。」と言いました。

みんなはおじぎをする間はちよつとしんとなりましたが、それからまたがやがやがやがや言いました。

「しずかに、みなさん。しずかにするのです。」先生が言いました。

「しつ、悦治^{えつじ}、やがましつたら、嘉助え、喜^きつこう。わあい。」
と一郎がいちばんうしろからあまりさわぐものを一人ずつしか
りました。

みんなはしんとなりました。

先生が言いました。

「みなさん、長い夏のお休みはおもしろかったですね。みなさ
んは朝から水泳ぎもできたし、林の中で鷹^{たか}にも負けないくらい
高く叫んだり、またにいさんの草刈りについて上^{うえ}の野原へ行つ
たりしたでしょう。けれどももうきのうで休みは終わりました。
これからは第二学期で秋です。むかしから秋はいちばんからだ
もこころもひきしまつて、勉強のできる時だといつてあるので
す。ですから、みなさんもきょうからまたいっしょにしつかり
勉強しましょう。それからこのお休みの間にみなさんのお友だ

ちが一人ふえました。それはそこにいる高田さんです。そのかたのおとうさんはこんど会社のご用で上の野原の入り口へおいでになっていられるのです。高田さんはいままでは北海道の学校におられたのですが、きょうからみなさんのお友だちになるのですから、みなさんは学校で勉強のときも、また栗拾いくりひろや魚とさかなりに行くときも、高田さんをさそうようにしなければなりません。わかりましたか。わかった人は手をあげてごらんなさい。」

すぐみんなは手をあげました。その高田とよばれた子も勢いよく手をあげましたので、ちよつと先生はわらいましたが、すぐ、

「わかりましたね、ではよし。」と言いましたので、みんなは火の消えたように一ぺんに手をおろしました。

ところが嘉助がすぐ、

「先生。」といつてまた手をあげました。

「はい。」先生は嘉助を指さしました。

「高田さん名はなんて言うべな。」

「高田三郎さぶろうさんです。」

「わあ、うまい、そりゃ、やつぱり又三郎だな。」嘉助はまるで手をたたいて机の中で踊るようになりましたので、大きなほうの子どもらはどつと笑いましたが、下の子どもらは何かこわいというふうにしいんとして三郎のほうを見ていたのです。

先生はまた言いました。

「きょうはみなさんは通信簿と宿題をもつてくるのでしたね。持って来た人は机の上へ出してください。私がいま集めに行きますから。」

みんなはばたばたかばん鞆をあけたりふろしきをとりたりして、通

信簿と宿題を机の上に出しました。そして先生が一年生のほうから順にそれを集めはじめました。そのときみんなはぎよつとしました。というわけはみんなのうしろのところについてか一人の大人おとなが立っていたのです。その人は白いだぶだぶの麻服を着て黒いてかてかしたはんけちをネクタイの代わりに首に巻いて、手には白い扇をもつて軽くじぶんの顔を扇あおぎながら少し笑つてみんなを見おろしていたのです。さあみんなはだんだんしいんとなつて、まるで堅くなつてしまいました。

ところが先生は別にその人を気にかけるふうもなく、順々に通信簿を集めて三郎の席まで行きますと、三郎は通信簿も宿題帳もないかわりに両手をにぎりこぶしにして二つ机の上ののせていたのです。先生はだまつてそこを通りすぎ、みんなのを集めてしまうとそれを両手でそろえながらまた教壇に戻りました。

「では宿題帳はこの次の土曜日に直して渡しますから、きょう持って来なかつた人は、あしたきつと忘れないで持って来てください。それは悦治さんと勇治さんゆうじと良作さんりょうさくとですね。ではきょうはここまでです。あしたからちゃんといつものとおりのしたくをしておいでなさい。それから四年生と六年生の人、先生といつしよに教室のお掃除そうじをしましょう。ではここまで。」

一郎が気をつけ、と言いみんなは一ぺんに立ちました。うしろの大人おとなも扇を下にさげて立ちました。

「礼。」先生もみんなも礼をしました。うしろの大人も軽く頭を下げました。それからずうつと下の組の子どもらは一目散に教室を飛び出しましたが、四年生の子どもらはまだもじもじしていました。

すると三郎はさつきのだぶだぶの白い服の人のところへ行き

ました。先生も教壇をおりてその人のところへ行きました。

「いやどうもご苦労さまでございます。」その大人はていねいに先生に礼をしました。

「じきみんなとお友だちになりますから。」先生も礼を返しながらい言いました。

「何ぶんどうかよろしくおねがいたします。それでは。」その人はまたていねいに礼をして目で三郎に合図すると、自分は玄関のほうへまわって外へ出て待っていますと、三郎はみんなの見ている中を目をりんとはってだまって昇降口から出て行って追いつき、二人は運動場を通って川下のほうへ歩いて行きました。

運動場を出るときその子はこつちをふりむいて、じつと学校やみんなのほうをにらむようにすると、またすたすた白服の大人おとな

について歩いて行きました。

「先生、あの人は高田さんのとうさんですか。」一郎が箒ほうきをもちながら先生にききました。

「そうです。」

「なんの用で来たべ。」

「上の野原の入り口にモリブデンという鉱石ができるので、それをだんだん掘るようにするためだそうです。」

「どこらあたりだべな。」

「私もまだよくわかりませんが、いつもみなさんが馬をつれて行くみちから、少し川下へ寄ったほうなようです。」

「モリブデン何にするべな。」

「それは鉄とまぜたり、薬をつくつたりするのだそうです。」

「そしたら又三郎も掘るべが。」嘉助が言いました。

「又三郎だない。高田三郎だぢや。」佐太郎が言いました。

「又三郎だ又三郎だ。」嘉助が顔をまっ赤かにしてがん張りしました。

「嘉助、うなも残つてらば掃除そうじしてすけろ。」一郎が言いました。

「わあい。やんたぢや。きょう四年生ど六年生だな。」

嘉助は大急ぎで教室をはねだして逃げてしまいました。

風がまた吹いて来て窓ガラスはまたがたがた鳴り、ぞうきんを入れたバケツにも小さな黒い波をたてました。

次の日一郎はあのおかしな子供が、きょううからほんとうに学校へ来て本を読んだりするかどうか早く見たいような気がして、いつもより早く嘉助をさそいました。ところが嘉助のほうは一郎よりもっとそう考えていたと見えて、とうにごはんもたべ、ふろしきに包んだ本ももって家の前へ出て一郎を待っていたので

した。二人は途中もいろいろその子のことを話しながら学校へ来ました。すると運動場には小さな子供らがもう七八人集まっています、棒かくしをしていましたが、その子はまだ来ていませんでした。またきのうのように教室の中にいるのかと思つて中をのぞいて見ましたが、教室の中はしいんとしてだれもいず、黒板の上にはきのう掃除のときぞうきんでふいた跡がかわいてぼんやり白い縞しまになっていました。

「きのうのやつまだ来てないな。」一郎が言いました。

「うん。」嘉助も言つてそこらを見まわしました。

一郎はそこで鉄棒の下へ行つて、じやみ上がりというやり方で、無理やりに鉄棒の上へのぼり両腕をだんだん寄せて右の腕木に行くと、そこへ腰掛けてきのう三郎の行つたほうをじつと見おろして待つていました。谷川はそつちのほうへきらきら光つ

てながれて行き、その下の山の上のほうでは風も吹いているらしく、ときどき萱^{かや}が白く波立っていました。

嘉助もやつぱりその柱の下でじつとそつちを見て待っていました。ところが二人はそんなに長く待つこともありませんでした。それは突然三郎がその下手のみちから灰いろの鞆^{かばん}を右手にかかえて走るようにして出て来たのです。

「来たぞ。」と一郎が思わず下にいる嘉助へ叫ぼうとしていますと、早くも三郎はどてをぐるつとまわつて、どんだん正門をはいって来ると、

「お早う。」とはつきり言いました。みんなはいつしよにそつちをふり向きましたが、一人も返事をしたものがありませんでした。

それは返事をしないのではなくて、みんなは先生にはいつで

も「お早うございます。」というように習っていたのですが、お互いに「お早う。」なんて言ったことがなかったのに三郎にそう言われても、一郎や嘉助はあんまりにわかで、また勢がいいのでとうとう臆おくしてしまつて一郎も嘉助も口の中でお早うというかわりに、もにやもにやつと言つてしまつたのでした。

ところが三郎のほうはべつだんそれを苦にするふうもなく、二三步また前へ進むとじつと立つて、そのまっ黒な目でぐるつと運動場じゆうを見まわしました。そしてしばらくだれか遊ぶ相手がないかさがしているようでした。けれどもみんなきよろきよろ三郎のほうはみても、やはり忙しそうに棒かくしをしたり三郎のほうへ行くものがありませんでした。三郎はちよつと具合が悪いようにそこにつつ立つていましたが、また運動場をもう一度見まわしました。

それからぜんたいこの運動場は何間なんげんあるかというように、正門から玄関まで大またに歩数を数えながら歩きはじめました。一郎は急いで鉄棒をはねおりて嘉助とならんで、息をこらしてそれを見ていました。

そのうち三郎は向こうの玄関の前まで行つてしまうと、こつちへ向いてしばらく暗算をするように少し首をまげて立っていました。

みんなはやはりきろきろそつちを見えています。三郎は少し困つたように両手をうしろへ組むと向こう側の土手のほうへ職員室の前を通つて歩きだしました。

その時風がざあつと吹いて来て土手の草はざわざわ波になり、運動場のまん中でさあつと塵ちりがあがり、それが玄関の前まで行くくと、きりきりとまわつて小さなつむじ風になって、黄いろな

塵は瓶^{びん}をさかさまにしたような形になつて屋根より高くのぼり
ました。

すると嘉助が突然高く言いました。

「そうだ。やつぱりあいづ又三郎だぞ。あいづ何かするときつ
と風吹いてくるぞ。」

「うん。」一郎はどうだかわからないと思ひながらもだまつて
そつちを見ていました。三郎はそんなことにはかまわず土手の
ほうへやはりすたすた歩いて行きます。

そのとき先生がいつものように呼び子をもつて玄関を出て来
たのです。

「お早うございます。」小さな子どもらはみんな集まりました。
「お早う。」先生はちらつと運動場を見まわしてから、「ではな
らんで。」と言ひながらビルルツと笛を吹きました。

みんなは集まつてきてきのうのとおりきちんとならびました。三郎もきのう言われた所へちゃんと立っています。

先生はお日さまがまつ正面なのですこしまぶしそうにしながら号令をだんだんかけて、とうとうみんなは昇降口から教室へはいました。そして礼がすむと先生は、

「ではみなさんきょうから勉強をはじめましょう。みなさんはちゃんとお道具をもつてきましたね。では一年生（と二年生）の人はお習字のお手本と硯すずりと紙を出して、二年生と四年生の方は算術帳と雑記帳と鉛筆を出して、五年生と六年生の方は国語の本を出してください。」

さあするとあつちでもこつちでも大きわぎがはじまりました。中にも三郎のすぐ横の四年生の机の佐太郎が、いきなり手をのばして二年生のかよの鉛筆をひらりととってしまったのです。

かよは佐太郎の妹でした。するとかよは、

「うわあ、兄あいな、木ペン取とてわかんないな。」と言いながら取り返そうとしますと佐太郎が、

「わあ、こいつおれのだなあ。」と言いながら鉛筆をふところの中へ入れて、あとはシナ人がおじぎするときのように両手を袖そでへ入れて、机へびつたり胸をくつつけました。するとかよは立たつて来て、

「兄あいな、兄あいなの木ペンはきのう小屋でなくしてしまったけなあ。よこせつたら。」と言いながら一生けん命とり返そうとしました。が、どうしてももう佐太郎は机にくつついた大きな蟹かにの化石かみみたいになつていたので、とうとうかよは立たつたまま口を大きくまげて泣きだしそうになりました。

すると三郎は国語の本をちゃんと机にのせて困つたようにし

てこれを見ていました。かよがとうとうぼろぼろ涙をこぼしたのを見ると、だまって右手に持つていた半分ばかりになった鉛筆を佐太郎の目の前の机に置きました。

すると佐太郎はにわかになんげになつて、むっくり起き上がりました。そして、

「くれる？」と三郎にききました。三郎はちよつとまごついたようでしたが覚悟したように、「うん。」と言いました。すると佐太郎はいきなりわらい出してふところの鉛筆をかよの小さな赤い手に持たせました。

先生は向こうで一年生の子の硯すずりに水をついでやつたりしていましたが、嘉助は三郎の前ですから知りませんでした。一郎はこれをいちばんうしろでちゃんと見ていました。そしてまるでなんと言つたらいいかわからない、変な気持ちで歯をき

りきり言わせました。

「では二年生のひとはお休みの前にならった引き算をもう一ぺん習ってみましょう。これを勘定してごらんなさい。」先生は黒板に25 - 12 = と書きました。二年生のこどもらはみんな一生けん命にそれを雑記帳にうつしました。かよも頭を雑記帳へくつつけるようにしています。「四年生の方はこれを置いて。」
17×4 = と書きました。

四年生は佐太郎をはじめ喜蔵も甲助こうすけもみんなそれをうつしました。

「五年生の方は読本とくほんの（二字空白）ページの（二字空白）課をひらいて声をたてないで読めるだけ読んでごらんなさい。わからない字は雑記帳へ拾っておくのです。」五年生もみんな言われたとおりはじめました。

「一郎さんは読本の（二字空白）ページをしらべてやはり知らない字を書き抜いてください。」

それがすむと先生はまた教壇をおりて、一年生の習字を一人見てあるきました。

三郎は両手で本をちやんと机の上へもって、言われたところを息もつかずじつと読んでいました。けれども雑記帳へは字を一つも書き抜いていませんでした。それはほんとうに知らない字が一つもないのか、たつた一本の鉛筆を佐太郎にやってしまつたためか、どっちともわかりませんでした。

そのうち先生は教壇へ戻つて二年生と四年生の算術の計算をして見せてまた新しい問題を出すと、今度は五年生の生徒の雑記帳へ書いた知らない字を黒板へ書いて、それになたとわけをつけました。そして、

「では嘉助さん、ここを読んで。」と言いました。

嘉助は二三度ひつかかりながら先生に教えられて読みました。三郎もだまって聞いていました。

先生も本をとって、じつと聞いていましたが、十行ばかり読むと、

「そこまで。」と言ってこんどは先生が読みました。

そうして一まわり済むと、先生はだんだんみんなの道具をしまわせました。

それから「ではここまで。」と言って教壇に立ちますと一郎がうしろで、

「気をつけい。」と言いました。そして礼がすむと、みんな順に外へ出てこんどは外へならばずにみんな別れ別れになって遊びました。

二時間目は一年生から六年生までみんな唱歌でした。そして先生がマンドリンを持って出て来て、みんなはいままでに習ったのを先生のマンドリンについて五つもうたいました。

三郎もみんな知っていて、みんなどんどん歌いました。そしてこの時間はたいへん早くたつてしまいました。

三時間目になるとこんどは二年生と四年生が国語で、五年生と六年生が数学でした。先生はまた黒板に問題を書いて五年生と六年生に計算させました。しばらくたつて一郎が答えを書いてしまうと、三郎のほうをちよつと見ました。

すると三郎は、どこから出したか小さな消し炭で雑記帳の上へがりがりと大きく運算していたのです。

次の朝、空はよく晴れて谷川はさらさら鳴りました。一郎は

途中で嘉助と佐太郎と悦治をさそつていつしよに三郎のうちのほうへ行きました。

学校の少し下流で谷川をわたつて、それから岸で楊やなぎの枝をみんなで一本ずつ折つて、青い皮をくるくるはいで鞭むちをこしらえて手でひゅうひゅう振りながら、上の野原への道をだんだんのぼつて行きました。みんなは早くも登りながら息をはあはあしました。

「又三郎ほんとにあそこのわき水まで来て待ちでるべが。」
「待ちでるんだ。又三郎うそこがないもな。」

「ああ暑う、風吹げばいいな。」

「どごがらだが風吹いでるぞ。」

「又三郎吹がせでらべも。」

「なんだがお日さんぼやつとして来たな。」

空に少しばかりの白い雲が出ました。そしてもうだいぶのぼつていました。谷のみんなの家がずうつと下に見え、一郎のうちの木小屋の屋根が白く光っています。

道が林の中に入り、しばらく道ははじめじめして、あたりは見えなくなりました。そしてまもなくみんなは約束のわき水の近くに来ました。するとそこから、

「おうい。みんな来たかい。」と三郎の高く叫ぶ声がしました。みんなはまるでせかせかと走つてのぼりました。向こうの曲がり角かどの所に三郎が小さなくちびるをきつと結んだまま、三人のかけ上つて来るのを見ていました。

三人はやつと三郎の前まで来ました。けれどもあんまり息がはあはあしてすぐには何も言えませんでした。嘉助などはあんまりもどかしいものですから、空へ向いて「ホッホウ。」と叫ん

で早く息を吐いてしまおうとしました。すると三郎は大きな声で笑いました。

「ずいぶん待ったぞ。それにきょうは雨が降るかもしれないうだよ。」

「そしたら早く行くべきさ。おらまんつ水飲んでぐ。」三人は汗をふいてしゃがんで、まつ白な岩からごぼごぼ噴^ふきだす冷たい水を何べんもすくつてのみました。

「ぼくのうちはここからすぐなんだ。ちようどあの谷の上あたりなんだ。みんなで帰りに寄ろうねえ。」

「うん。まんつ野原さ行くべきさ。」

みんながまたあるきはじめてときわき水は何かを知らせるようにぐうつと鳴り、そこらの木もなんだかざあつと鳴ったようでした。

五人は林のすその藪やぶの間を行ったり岩かけの小さくくずれる所を何べんも通ったりして、もう上の野原の入り口に近くなりました。

みんなはそこまで来ると来たほうからまた西のほうをながめました。

光ったりかげったり幾通りにも重なったたくさんの丘の向こうに、川に沿ったほんとうの野原がぼんやり碧あおくひろがっているのです。

「ありや、あいづ川だぞ。」

「春日明神かすがみょうじんさんの帯のようだな。」三郎が言いました。

「何のようだよ。」一郎がききました。

「春日明神さんの帯のようだよ。」

「うな神さんの帯見だごとあるが。」

「ぼく北海道で見たよ。」

みんなはなんのことだかわからずだまつてしまいました。

ほんとうにそこはもう上の野原の入り口で、きれいに刈られた草の中に一本の大きな栗くりの木が立って、その幹は根もとの所がまつ黒に焦げて大きな洞ほらのようになり、その枝には古い縄なわや、切れたわらじなどがつるしてありました。

「もう少し行ぐづどみんなして草刈ってるぞ。それから馬のいるどごもあるぞ。」一郎は言いながら先に立って刈った草のなかの一ぽんみちをぐんぐん歩きました。

三郎はその次に立って、

「ここには熊くまいないから馬をはなしておいてもいいなあ。」と言つて歩きました。

しばらく行くとみちばたの大きな檜ひのきの木の下に、縄で編んだ

袋が投げ出してあつて、たくさんの草たばがあつちにもこつちにもころがつていました。

せなかに草束をしょつた二匹の馬が、一郎を見て鼻をふるふる鳴らしました。

「兄^{あい}な、いるが。兄^{あい}な、来たぞ。」一郎は汗をぬぐいながら叫びました。

「おおい。ああい。そこにいろ。今行くぞ。」ずうつと向こうのくぼみで、一郎のにいさんの声がしました。

日はぱつと明るくなり、にいさんがそつちの草の中から笑つて出て来ました。

「善^ゆぐ来たな。みんなも連れで来たのが。善^ゆぐ来た。戻りに馬こ連れでてけるな。きょうあ午^{ひる}まがらきつと曇る。おらもう少し草集めて仕舞^むがらな、うなだ遊ばばあの土手の中さはいつて

ろ。まだ牧馬の馬二十匹ばかりはいるがらな。」

にいさんは向こうへ行こうとして、振り向いてまた言いました。

「土手がら外さ出はるなよ。迷つてしまふづどあぶないがらな。午まひるになつたらまた来るがら。」

「うん。土手の中にいるがら。」

そして一郎のにいさんは行つてしまいました。

空にはうすい雲がすつかりかかり、太陽は白い鏡のようになつて、雲と反対に馳はせました。風が出て来てまだ刈つていない草は一面に波を立てます。一郎はさきにたつて小さなみちをまっすぐに行くと、まもなくどてになりました。その土手の一とこちぎれたところに二本の丸太の棒を横にわたしてありました。悦治がそれをくぐろうとしますと、嘉助が、

「おらこつたなものはずせだぞ。」と言いながら片っぽうのはじをぬいて下におろしましたのでみんなはそれをはね越えて中にはいりました。

向こうの少し小高いところにてかてか光る茶いろの馬が七匹ばかり集まって、しっぽをゆるやかにばしやばしやふつっているのです。

「この馬みんな千円以上するづもな。来年がらみんな競馬さも出はるのだづぢやい。」一郎はそばへ行きながら言いました。

馬はみんないままでさびしくつてしようなかつたというように一郎たちのほうへ寄つてきました。そして鼻づらをずうつとのばして何かほしそうにするのです。

「ははあ、塩をけろづのだな。」みんなは言いながら手を出して馬になめさせたりしましたが、三郎だけは馬になれていないら

しく気味わるそうに手をポケットへ入れてしまいました。

「わあ、又三郎馬おっかながるぢやい。」と悦治が言いました。すると三郎は、

「こわくなんかないやい。」と言いながらすぐポケットの手を馬の鼻づらへのぼしましたが、馬が首をのぼして舌をべろりと出すと、さつと顔いろを変えてすばやくまた手をポケットへ入れてしまいました。

「わあい、又三郎馬おっかながるぢやい。」悦治がまた言いました。すると三郎はすっかり顔を赤くしてしばらくもじもじしていましたが、

「そんなら、みんなで競馬やるか。」と言いました。

競馬ってどうするのかとみんな思いました。

すると三郎は、

「ぼく競馬何べんも見たぞ。けれどもこの馬みんな鞍くらがないから乗れないや。みんなで一匹ずつ馬を追つて、はじめに向こうの、そら、あの大きな木のところに着いたものを一等にしよう。」

「そいづおもしろいな。」嘉助が言いました。

「しからえるぞ。牧夫に見つけらえでがら。」

「大丈夫だよ。競馬に出る馬なんか練習をしていないといけないんだい。」三郎が言いました。

「よしおらこの馬だぞ。」

「おらこの馬だ。」

「そんならぼくはこの馬でもいいや。」みんなは楊やなぎの枝や萱かやの穂でしゅうと言いなから馬を軽く打ちました。

ところが馬はちつともびくともしませんでした。やはり下へ首をたれて草をかいだり、首をのばしてそらのけしきをもつ

とよく見るといふようにしているのです。

一郎がそこで両手をぴしゃんと打ち合わせて、だあ、と言いました。

するとわかにかに七匹ともまるでたてがみをそろえてかけ出したのです。

「うまあい。」嘉助ははね上がって走りました。けれどもそれはどうも競馬にはならないのでした。

第一、馬はどこまでも顔をならべて走るのでしたし、それにそんなに競馬するくらい早く走るのでもなかつたのです。それでもみんなはおもしろがつて、だあだと言いながら一生けん命そのあとを追いました。

馬はすこし行くと立ちどまりそうになりました。みんなもすこしはあはあしましたが、こらえてまた馬を追いました。する

といつか馬はぐるつときつきの小高いところをまわつて、さつき五人ではいつて来たどての切れた所へ来たのです。

「あ、馬出はる、馬出はる。押えろ 押えろ。」一郎はまつ青さおになつて叫びました。じつさい馬はどての外へ出たのらしいのでした。どんどん走つて、もうさつきの丸太の棒を越えそうになりました。

一郎はまるであわてて、

「どう、どう、どうどう。」と言いながら一生けん命走つて行つて、やつとそこへ着いてまるでころぶようにしながら手をひろげたときは、そのときはもう二匹は柵さくの外へ出ていたのです。

「早く来て押えろ。早く来て。」一郎は息も切れるように叫びながら丸太棒をもとのようにしました。

四人は走つて行つて急いで丸太をくぐつて外へ出ますと、二匹

の馬はもう走るでもなく、どての外に立つて草を口で引っぱつて抜くようにしています。

「そろそろど押えろよ。そろそろど。」と言いながら一郎は一びきのくつわについた札のところをしつかり押えました。嘉助と三郎がもう一匹を押えようとそばへ寄りますと、馬はまるでおどろいたようにどてへ沿つて一目散に南のほうへ走つてしまいました。

「兄あいな、馬あ逃げる、馬あ逃げる。兄あいな、馬逃げる。」とうしろで一郎が一生けん命叫んでいます。三郎と嘉助は一生けん命馬を追いました。

ところが馬はもう今度こそほんとうに逃げるつもりらしくつたのです。まるで丈たけぐらいある草をわけて高みになったり低くなったり、どこまでも走りました。

嘉助はもう足がしびれてしまつて、どこをどう走っているのかわからなくなりました。

それからまわりがまっ蒼さおになつて、ぐるぐる回り、とうとう深い草の中に倒れてしまいました。馬の赤いたてがみと、あとを追つて行く三郎の白いシャツポが終わりにちらつと見えました。

嘉助は、仰向けになつて空を見ました。空がまっ白に光つて、ぐるぐる回り、そのこちらを薄いねずみ色の雲が、速く速く走っています。そしてカンカン鳴っています。

嘉助はやつと起き上がつて、せかせか息しながら馬の行つたほうに歩き出しました。草の中には、今馬と三郎が通つた跡らしく、かすかな道のようなものがありました。嘉助は笑いました。そして、（ふん、なあに馬どこかでこわくなつてのつこり

立つてるさ、) と思ひました。

そこで嘉助は、一生懸命それをつけて行きました。

ところがその跡のようなのは、まだ百歩も行かないうちに、おとこえしや、すてきに背の高いあざみの中で、二つにも三つにも分かれてしまつて、どれがどれやらいつこうわからなくなつてしまいました。

嘉助は「おうい。」と叫びました。

「おう。」とどこかで三郎が叫んでいるようです。思い切つて、そのまん中を進みました。

けれどもそれも、時々切れたり、馬の歩かないような急な所を横ぎまに過ぎたりするのでした。

空はたいへん暗く重くなり、まわりがぼうつとかすんで来ました。冷たい風が、草を渡りはじめ、もう雲や霧が切れ切れに

なつて目の前をぐんぐん通り過ぎて行きました。

（ああ、こいつは悪くなつて来た。みんな悪いことはこれから集^{たが}つてやつて来るのだ。）と嘉助は思いました。全くそのとおり、にわかには馬の通つた跡は草の中でなくなつてしまいました。（ああ、悪くなつた、悪くなつた。）嘉助は胸をどきどきさせました。

草がからだを曲げて、パチパチ言つたり、さらさら鳴つたりしました。霧がことに滋^{しげ}くなつて、着物はすつかりしめつてしまいました。

嘉助は咽喉^{のど}いっぱい叫びました。

「一郎、一郎、こつちさ来う。」ところがなんの返事も聞こえません。黒板から降る白墨の粉のような、暗い冷たい霧の粒が、そこら一面踊りまわり、あたりがにわかにはシインとして、陰気

に陰気になりました。草からは、もうしずくの音がポタリポタリと聞こえて来ます。

嘉助は、もう早く一郎たちの所へ戻ろうとして急いで引つ返しました。けれどもどうも、それは前に来た所とは違っていたようでした。第一、あざみがあんまりたくさんありましたし、それに草の底にさつきなかつた岩かけが、たびたびころがつていました。そしてとうとう聞いたこともない大きな谷が、いきなり目の前に現われました。すすきがざわざわわつと鳴り、向こうのほうは底知れずの谷のように、霧の中に消えているではありませんか。

風が来ると、すすきの穂は細いたくさんの手をいっぱいのばして、忙しく振って、

「あ、西さん、あ、東さん、あ、西さん、あ、南さん、あ、西さ

ん。」なんて言っているようでした。

嘉助はあんまり見つともなかつたので、目をつむつて横を向きました。そして急いで引つ返しました。小さな黒い道がいきなり草の中に出て来ました。それはたくさんの馬のひづめの跡でできあがつていたのです。嘉助は夢中で短い笑い声をあげて、その道をぐんぐん歩きました。

けれども、たよりのないことは、みちのはばが五寸ぐらいになつたり、また三尺ぐらいに変わつたり、おまけになんだかぐるつと回っているように思われました。そして、とうとう大きくなつてつぺんの焼けた栗くりの木の前まで来た時、ぼんやり幾つにも別れてしまいました。

そこはたぶんは、野馬の集まり場所であつたでしょう。霧の中に丸い広場のように見えたのです。

嘉助はがっかりして、黒い道をまた戻りはじめました。知らない草穂が静かにゆらぎ、少し強い風が来る時は、どこかで何かが合図をしてでもいるように、一面の草が、それ来たつとみなからだを伏せて避けました。

空が光つてキインキインと鳴っています。

それからすぐ目の前の霧の中に、家の形の大きな黒いものがあらわれました。嘉助はしばらく自分の目を疑って立ちどまっていました。やはりどうしても家らしかったので、こわごわもつと近寄って見ますと、それは冷たい大きな黒い岩でした。空がくるくるくるつと白く揺らぎ、草がバラツと一度にしくを払いました。

（間違つて原の向こう側へおりれば、又三郎もおれも、もう死ぬばかりだ。）と嘉助は半分思うように半分つぶやくようにし

ました。それから叫びました。

「一郎、一郎、いるが。一郎。」

また明るくなりました。草がみないつせいによろこびの息をします。

「伊佐戸いさどの町の、電気工夫わらすの童あ、山男に手足いしぼらえてたふだ。」といつかだれかの話した言葉が、はつきり耳に聞こえて来ます。

そして、黒い道がにわかになくなってしまいました。あたりがほんのしばらくしいんとなりました。それから非常に強い風が吹いて来ました。

空が旗のようにぱたぱた光って飜り、火花がパチパチパチツと燃えました。嘉助はとうとう草の中に倒れてねむってしまいました。

*

そんなことはみんなどこかの遠いできごとのようでした。

もう又三郎がすぐ目の前に足を投げだしてだまつて空を見あげているのです。いつかいつものねずみいろの上着の上にガラスのマントを着ているのです。それから光るガラスの靴くつをはいているのです。

又三郎の肩には栗くりの木の影が青く落ちていきます。又三郎の影は、また青く草に落ちていきます。そして風がどんどんどん吹いているのです。

又三郎は笑いもしなければ物も言いません。ただ小さなくちびるを強そうにきつと結んだまま黙つてそらを見えています。いきなり又三郎はひらつとそらへ飛びあがりました。ガラスのマントがギラギラ光りました。

*

ふと嘉助は目をひらきました。灰いろの霧が速く速く飛んでいます。

そして馬がすぐ目の前にのっそりと立っていたのです。その目は嘉助を恐れて横のほうを向いていました。

嘉助ははね上がって馬の名札を押えました。そのうしろから三郎がまるで色のなくなつたくちびるをきつと結んでこつちへ出てきました。

嘉助はぶるぶるふるえました。

「おうい。」霧の中から一郎のにいさんの声がしました。雷もごろごろ鳴っています。

「おおい、嘉助。いるが。嘉助。」一郎の声もしました。嘉助はよろこんでとびあがりました。

「おおい。いる、いる。一郎。おおい。」

一郎のにいさんと一郎が、とつぜん目の前に立ちました。嘉助はにわか泣き出しました。

「捜したぞ。あぶながったぞ。すっかりぬれだな。どう。」一郎のにいさんはなれた手つきで馬の首を抱いて、もつてきたくつわをすばやく馬のくちにはめました。

「さあ、あべさ。」

「又三郎びつくりしたべあ。」一郎が三郎に言いました。三郎はだまって、やっぱりきつと口を結んでうなずきました。

みんなは一郎のにいさんについて、ゆるい傾斜を二つほどのぼり降りしました。それから、黒い大きな道について、しばらく歩きました。

稲光りが二度ばかり、かすかに白くひらめきました。草を焼

くにおいがして、霧の中を煙がぼうつと流れています。

一郎のにいさんが叫びました。

「おじいさん。いだ、いだ。みんないだ。」

おじいさんは霧の中に立っついていて、

「ああ心配した、心配した。ああよがった。おお嘉助。寒がべあ、さあはいれ。」と言いました。嘉助は一郎と同じようにやはりこのおじいさんの孫なようでした。

半分に焼けた大きな栗くりの木の根もとに、草で作った小さな囲いがあつて、チヨロチヨロ赤い火が燃えています。

一郎のにいさんは馬をなま櫓うらの木につなぎました。

馬もひひんと鳴いています。

「おおむぞやな。な。なんぼが泣いだがな。そのわろは金山掘りのわろだな。さあさあみんな団子たべろ。食べろ。な、今こつ

ちを焼ぐがらな。全体どこまで行つてだつた。」

「笹長根ささながねのおり口だ。」と一郎のにいさんが答えました。

「あぶないがった。あぶないがった。向こうさ降りだら馬も人もそれつ切りだつたぞ。さあ嘉助、団子食べろ。このわるもたべろ。さあさあ、こいづも食べろ。」

「おじいさん。馬置いてくるが。」と一郎のにいさんが言いました。

「うんうん。牧夫来るとまだやがましがらな、したども、も少し待で。またすぐ晴れる。ああ心配した。おれも虎とらこ山やまの下まで行つて見で来た。はあ、まんつよがった。雨も晴れる。」

「けさほんとに天気よがったのにな。」

「うん。またよくなるさ、あ、雨漏つて来たな。」

一郎のにいさんが出て行きました。天井がガサガサガサガサ

言います。おじいさんが笑いながらそれを見上げました。

にいさんがまたはいって来ました。

「おじいさん。明るくなった。雨あ霽れだ。」

「うんうん、そうが。さあみんなよつく火にあだれ、おらまた草刈るがらな。」

霧がふつと切れました。日の光がさつと流れてはいりました。その太陽は、少し西のほうに寄ってかかり、幾片かの蠟ろうのような霧が、逃げおくれてしかたなしに光りました。

草からはしずくがきらきら落ち、すべての葉も茎も花も、ことの終わりの日の光を吸っています。

はるかな西の碧あおい野原は、今泣きやんだようにまぶしく笑い、向こうの栗くりの木は青い後光を放ちました。

みんなはもう疲れて一郎をさきに野原をおりました。わき水

のところ、三郎はやつぱりだまつて、きつと口を結んだまま、みんなに別れて、じぶんだけおとうさんの小屋のほうへ帰って行きました。

帰りながら嘉助が言いました。

「あいづやっぱり風の神だぞ。風の神の子っ子だぞ。あそごさ二人して巢食つてるんだぞ。」

「そでないよ。」一郎が高く言いました。

次の日は朝のうちには雨でしたが、二時間目からだんだん明るくなつて三時間目の終わりの十分休みにはとうとうすっかりやみ、あちこちに削つたような青ぞらもできて、その下をまっ白なうろこ雲がどンドン東へ走り、山の萱かやからも栗の木からも残りの雲が湯げのように立ちました。

「下がつたら葡萄蔓えびづるとりに行がないが。」耕助が嘉助にそつと言いました。

「行く行く。三郎も行がないが。」嘉助がさそいました。耕助は、「わあい、あそご三郎さ教えるやないぢや。」と言いましたが三郎は知らないで、

「行くよ。ぼくは北海道でもとつたぞ。ぼくのおかあさんは樽たるへ二つつ漬つけたよ。」と言いました。

「葡萄ぶどうとりにおらも連れでがないが。」二年生の承吉しょうきちも言いました。

「わがないぢや。うなどき教えるやないぢや。おら去年な新しいどご見つけただぢや。」

みんなは学校の済むのが待ち遠しかったのでした。五時間目が終わると、一郎と嘉助と佐太郎と耕助と悦治と三郎と六人で

学校から上流のほうへ登って行きました。少し行くと一けんの藁わらやねの家があつて、その前に小さなたばこ畑がありました。たばこの木はもう下のほうの葉をつんであるので、その青い茎が林のようにきれいにならんでいかにもおもしろそうでした。

すると三郎はいきなり、

「なんだい、この葉は。」と言いながら葉を一枚むしつて一郎に見せました。すると一郎はびつくりして、

「わあ、又三郎、たばこの葉とるづど専売局にうんとしかられるぞ。わあ、又三郎何してとつた。」と少し顔いろを悪くして言いました。みんなも口々に言いました。

「わあい。専売局であ、この葉一枚ずつ数えて帳面さつけでるだ。おら知らないぞ。」

「おらも知らないぞ。」

「おらも知らないぞ。」みんな口をそろえてはやしました。

すると三郎は顔をまっ赤かにして、しばらくそれを振り回して何か言おうと考えていましたが、

「おら知らないでとつたんだい。」とおこつたように言いました。

みんなはこわそうに、だれか見ていないかというように向この家を見ました。たばこばたけからもうもうとあがる湯げの向こうで、その家はしいんとしてだれもいたようではありませんでした。

「あの家一年生の小助こすけの家だぢゃい。」嘉助が少しなだめるように言いました。ところが耕助はじめからじぶんの見つけた葡萄ぶどうやぶ藪へ、三郎だのみんなあんまり来ておもしろくなかつたもんですから、意地悪くもいちど三郎に言いました。

「わあ、三郎なんぼ知らないたつてわがないんだぢゃ。わあい、

三郎もどのとおりにしてまゆんだであ。」

三郎は困ったようにしてまたしばらくだまっていたが、「そんなら、おいらここへ置いてくからいいや。」と言いながらさっきの木の根もとへそつとその葉を置きました。すると一郎は、

「早くあべ。」と言って先にたつてあるきだしましたのでみんなもついて行きましたが、耕助だけはまだ残つて「ほう、おら知らないぞ。ありや、又三郎の置いた葉、あすごにあるぢやい。」なんて言っているのですが、みんながどンドン歩きだしたので耕助もやつとついて来ました。

みんなは萱かやの間の小さなみちを山のほうへ少しのぼりますと、その南側に向いたくぼみに栗くりの木があちこち立って、下には葡萄ぶどうがもくもくした大きな藪やぶになっていました。

「ごごおれ見つつけだのだがらみんなあんまりとるやないぞ。」
 耕助が言いました。

すると三郎は、

「おいら栗のほうをとるんだい。」といつて石を拾つて一つの枝へ投げました。青いいがが一つ落ちました。

三郎はそれを棒きれでむいて、まだ白い栗を二つとりました。
 みんなは葡萄ぶどうのほうへ一生けん命でした。

そのうち耕助がも一つの藪やぶへ行こうと一本の栗くりの木の下を通りますと、いきなり上からしづくが一ぺんにぎつと落ちてきましたので、耕助は肩からせなから水へはいったようになりました。耕助はおどろいて口をあいて上を見ましたら、いつか木の上に三郎がのぼっていて、なんだか少しわらいながらじぶんも袖そでぐちで顔をふいていたのです。

「わあい、又三郎何する。」耕助はうらめしそうに木を見あげました。

「風が吹いたんだい。」三郎は上でくつつわらいながら言いました。

耕助は木の下をはなれてまた別の藪で葡萄をとりはじめました。もう耕助はじぶんでも持てないくらいあちこちへためて、口も紫いろになってまるで大きく見えました。

「さあ、このくらい持つて戻らないが。」一郎が言いました。

「おら、もつと取つてぐぢや。」耕助が言いました。

そのとき耕助はまた頭からつめたいしずくをぎあつとかぶりしました。耕助はまたびつくりしたように木を見上げましたが今度は三郎は木の上にはいませんでした。

けれども木の向こう側に三郎のねずみいろのひじも見えてい

ましたし、くつくつ笑う声もしましたから、耕助はもうすっかりおこつてしまいました。

「わあい又三郎、まだひととき水掛けだな。」

「風が吹いたんだい。」

みんなはどつと笑いました。

「わあい又三郎、うなそごで木ゆすつたけあなあ。」

みんなはどつとまた笑いました。

すると耕助はうらめしそうにしばらくだまつて三郎の顔を見ながら、

「うあい又三郎、汝^{うな}などあ世界になくてもいいなあ。」

すると三郎はずるそうに笑いました。

「やあ耕助君、失敬したねえ。」

耕助は何かもつと別のことを言おうと思いましたが、あんま

りおこつてしまつて考え出すことができなかつたのでまた同じように叫びました。

「うあい、うあいだ、又三郎、うなみだいな風かぜなど世界じゆうになくてもいいなあ、うわあい。」

「失敬したよ、だつてあんまりきみもぼくへ意地悪をするものだから。」三郎は少し目をパチパチさせて気の毒そうに言いました。けれども耕助のいかりはなかなか解けませんでした。そして三度同じことをくりかえしたのです。

「うわい又三郎、風などあ世界じゆうになくてもいいな、うわい。」

すると三郎は少しおもしろくなつたようでもたつくつく笑いだしてたずねました。

「風が世界じゆうになくつてもいいつてどういふんだい。いい

と箇条をたてていつてごらん。そら。」三郎は先生みたいな顔つきをして指を一本だしました。

耕助は試験のようだし、つまらないことになったと思つてたいへんくやしかったのですが、しかたなくしばらく考えてから言いました。

「汝^{うな}など悪戯^{わるさ}ばりさな、傘^{かさ}ぶつこわしたり。」

「それからそれから。」三郎はおもしろそうに一足進んで言いました。

「それがら木折つたり転覆したりさな。」

「それから、それからどうだい。」

「家もぶつこわさな。」

「それから。それから、あとはどうだい。」

「あかしも消さな。」

「それからあととは？ それからあととは？ どうだい。」

「シャツもとばさな。」

「それから？ それからあととは？ あとはどうだい。」

「^{かさ}笠もとばさな。」

「それからそれから。」

「それから、ラ、ラ、電信ばしらも倒さな。」

「それから？ それから？ それから？」

「それから屋根もとばさな。」

「アアハハハ、屋根は家のうちだい。どうだいまだあるかい。

それから、それから？」

「それだから、ララ、それだからランプも消さな。」

「アアハハハハ、ランプはあかしのうちだい。けれどそれだけかい。え、おい。それから？ それからそれから。」

耕助はつまつてしまいました。たいていもう言つてしまつたのですから、いくら考えてももうできませんでした。

三郎はいよいよおもしろそうに指を一本立てながら、

「それから？ それから？ ええ？ それから？」と云うのでした。

耕助は顔を赤くしてしばらく考えてからやつと答えました。

「風車もぶっこわさな。」

すると三郎はこんどこそはまるで飛び上がつて笑つてしまいました。みんなも笑いました。笑つて笑つて笑いました。

三郎はやつと笑うのをやめて言いました。

「そらごらん、とうとう風車などを言つちやつたらう。風車なら風を悪く思つちやいなんだよ。もちろん時々こわすこともあるけれども回してやる時のほうがずっと多いんだ。風車なら

ちつとも風を悪く思っていないんだ。それに第一お前のさつきからの数えようはあんまりおかしいや。ララ、ララ、ばかり言つたんだろう。おしまいにとうとう風車なんか数えちやつた。ああおかしい。」

三郎はまた涙の出るほど笑いました。

耕助もさつきからあんまり困つたためにおこつていたのもだんだん忘れて来ました。そしてつい三郎といつしよに笑い出してしまったのです。すると三郎もすつかりきげんを直して、

「耕助君、いたずらをして済まなかつたよ。」と言いました。

「さあそれであ行くべな。」と一郎は言いながら三郎にぶどうを五ふさばかりくれました。

三郎は白い栗くりをみんなに二つずつ分けました。そしてみんなは下のみちまでいつしよにおりて、あとはめいめいのうちへ帰つ

たのです。

次の朝は霧がじめじめ降って学校のうしろの山もぼんやりしか見えませんでした。ところがききようも二時間目ころからだんだん晴れてまもなく空はまっ青さおになり、日はかんかん照って、お午ひるになつて一、二年が下がつてしまふとまるで夏のように暑くなつてしまいました。

ひるすぎは先生もたびたび教壇で汗をふき、四年生の習字も五年生六年生の図画もまるでむし暑くて、書きながらうとうとするのでした。

授業が済むとみんなはすぐ川下のほうへそろつて出かけました。嘉助が、

「又三郎、水泳ぎに行かないが。小さいやづど今ころみんな行つ

てるぞ。」と言いましたので三郎もついて行きました。

そこはこの前上の野原へ行つたところよりも、もし下流で右のほうからも一つの谷川がはいって来て、少し広い河原になり、すぐ下流は大きなさいかちの木のはえた崖がけになっているのでした。

「おおい。」とききに來ているこどもらがはだかで両手をあげて叫びました。一郎やみんなは、河原のねむの木の間をまるで徒競走のように走つて、いきなりきものをぬぐとすぐどぶんどぶんと水に飛び込んで両足をかわるがわる曲げて、だあんだあんと水をたたくようにしながら斜めにならんで向こう岸へ泳ぎはじめました。前にいたこどもらもあとから追い付いて泳ぎはじめました。三郎もきものをぬいでみんなのあとから泳ぎはじめましたが、途中で声をあげてわらいました。すると向こう岸に

ついた一郎が、髪をあざらしのようにしてくちびるを紫にしてわくわくふるえながら、

「わあ又三郎、何してわらった。」と言いました。

三郎はやつぱりふるえながら水からあがつて、

「この川冷たいなあ。」と言いました。

「又三郎何してわらった？」一郎はまたききました。

三郎は、

「おまえたちの泳ぎ方はおかしいや。なぜ足をだぶだぶ鳴らすんだい。」と言いながらまた笑いました。

「うわあい。」と一郎は言いましたが、なんだかきまりが悪くなつたように、

「石取りきないが。」と言いながら白い丸い石をひろいました。

「するする。」こどもらがみんな叫びました。

「おれそれであ、あの木の上から落とすがらな。」と一郎は言いながら崖がけの中ごろから出ているさいかちの木へするするのぼつて行きました。そして、

「さあ落とすぞ。一二三。」と言いながらその白い石をどぶんと淵ふちへ落としました。

みんなはわれ勝ちに岸からまつさかさまに水にとび込んで、青白いらつこのような形をして底へもぐつて、その石をとろうとしました。

けれどもみんな底まで行かないに息がつまって浮かびだして来て、かわるがわるふうとそこらへ霧をふきました。

三郎はじつとみんなのするのを見ていました。みんなが浮かんできてからじぶんもどぶんとはいつて行きました。けれどもやつぱり底まで届かずに浮いてきたのでみんなはどつと笑い

ました。そのとき向こうの河原のねむの木のところを大人が四人、肌ぬぎはだになつたり、網をもつたりしてこつちへ来るのでした。

すると一郎は木の上でまるで声をひくくしてみんなに叫びました。

「おお、発破はっぱだぞ。知らないふりしてろ。石とりやめで早くみんな下流しもさがれ。」そこでみんなは、なるべくそつちを見ないふりをしながら、いつしよに砥石といしをひろつたり、鶺鴒せきりを追つたりして、発破のことなど、すこしも気がつかないふりをしていました。

すると向こうの淵ふちの岸では、下流の坑夫しろうすけをしていた庄助しろうすけが、しばらくあちこち見まわしてから、いきなりあぐらをかいて砂利じやりの上へすわつてしまいました。それからゆつくり腰からたばこ

入れをとつて、きせるをくわえてぱくぱく煙をふきだしました。奇体だと思つていましたら、また腹かけから何か出しました。

「発破はつぱだぞ、発破だぞ。」とみんな叫びました。

一郎は手をふつてそれをとめました。庄助は、きせるの火をしずかにそれへうつしました。うしろにいた一人はすぐ水にはいつて網をかまえました。庄助はまるで落ちついて、立つて一あし水にはいるとすぐその持ったものを、さいかちの木の下のところへ投げこみました。するとまもなく、ぼおというようなひどい音がして水はむくつと盛りあがり、それからしばらくそこらあたりがきいんと鳴りました。

向こうの大人おとなたちはみんな水へはいりました。

「さあ、流れて来るぞ。みんなとれ。」と一郎が言いました。まもなく耕助は小指ぐらいの茶いろなかじかが横向きになつて流

れて来たのをつかみましたし、そのうしろでは嘉助が、まるで瓜うりをすするときのような声を出しました。それは六寸ぐらいある鮒ふなをとつて、顔をまつ赤かにしてよろこんでいたのです。それからみんなとつて、わあわあよろこびました。

「だまつてろ、だまつてろ。」一郎が言いました。

そのとき向こうの白い河原を肌はだぬぎになつたり、シャツだけ着たりした大人が五六人かけて来ました。そのうしろからはちょうど活動写真のように、一人の網シャツを着た人が、はだか馬に乗つてまつしぐらに走つて来ました。みんな発破の音を聞いて見に来たのです。

庄助はしばらく腕を組んでみんなののを見ていましたが、「さつぱりいないな。」と言いました。すると三郎がいつのまにか庄助のそばへ行つていました。そして中ぐらいの鮒を二匹、

「魚返すよ。」といつて河原へ投げるように置きました。すると庄助が、

「なんだこの童あ、きたいなやづだな。」と言いながらじろじろ三郎を見ました。

三郎はだまつてこつちへ帰つてきました。

庄助は変な顔をしてみえています。みんなはどつとわらいました。

庄助はだまつてまた上流へ歩きだしました。ほかのおとなたちもついて行き、網シャツの人は馬に乗つて、またかけて行きました。耕助が泳いで行つて三郎の置いて来た魚を持ってきました。みんなはそこでまたわらいました。

「発破かけたら、雑魚撒かせ。」嘉助が河原の砂っぱの上で、ぴよんぴよんはねながら高く叫びました。

みんなはとつた魚を石で囲んで、小さな生け州をこしらえて、生きかえつてももう逃げて行かないようにして、また上流のさいかちの木へのぼりはじめました。

ほんとうに暑くなつて、ねむの木もまるで夏のようにぐつたり見えましたし、空もまるで底なしの淵ふちのようになりました。

そのころだれかが、

「あ、生け州ぶつこわすところだぞ。」と叫びました。見ると一人の変に鼻のがつた、洋服を着てわらじをはいた人が、手にはステッキみたいなものをもつて、みんなの魚をぐちやぐちやかきまわしているのです。

その男はこつちへびちやびちや岸をあるいて来ました。

「あ、あいづ専売局だぞ。専売局だぞ。」佐太郎が言いました。

「又三郎、うなのとつた煙草たばこの葉めつけたんだで、うな、連れ

でぐさ来たぞ。」嘉助が言いました。

「なんだい。こわくないや。」三郎はきつと口をかんで言いました。

「みんな又三郎のごと囲んでろ、囲んでろ。」と一郎が言いました。

そこでみんなは三郎をさいかちの木のいちばん中の枝に置いて、まわりの枝にすつかり腰かけました。

「来た来た、来た来た。来たつ。」とみんなは息をこらしました。

ところがその男は別に三郎をつかまえるふうでもなく、みんなの前を通りこして、それから淵ふちのすぐ上流の浅瀬を渡ろうとしました。それもすぐに川をわたるでもなく、いかにもわらじや脚絆きやはんのきたなくなつたのをそのまま洗うというふうに、もう何べんも行ったたり来たりするもんですから、みんなはだんだん

こわくなくなりましたが、そのかわり気持ちが悪くなってきました。

そこでとうとう一郎が言いました。

「お、おれ先に叫ぶから、みんなあとから、一二三で叫ぶことだ。いいか。」

あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生せんせ言うでないか。一、二い、三。」

「あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生言うでないか。」

その人はびつくりしてこつちを見ましたけれども、何を言ったのかよくわからないというようすでした。そこでみんなはまた言いました。

「あんまり川を濁すなよ、

いつでも先生、言うでないか。」

鼻のどがった人はすばすばと、煙草たばこを吸うときのような口つきで言いました。

「この水飲むのか、ここらでは。」

「あんまり川をにごすなよ、

いつでも先生言うでないか。」

鼻のどがった人は少し困ったようにして、また言いました。

「川をあるいてわるいのか。」

「あんまり川をにごすなよ、

いつでも先生言うでないか。」

その人はあわてたのをごまかすように、わざとゆっくり川をわたって、それからアルプスの探検みたいな姿勢をとりながら、
青い粘土あかじやりと赤砂利がけの崖をななめにのぼって、崖の上のたばこ畑

へはいつてしまいました。

すると三郎は、

「なんだい、ぼくを連れにきたんじゃないや。」と言いながら
まつききにどぶんと淵ふちへとび込みました。

みんなもなんだか、その男も三郎も気の毒なようなおかしな
がらんとした気持ちになりながら、一人ずつ木からはねおりて、
河原に泳ぎついて、魚さかなを手ぬぐいにつつんだり、手にもったり
して家に帰りました。

次の朝、授業の前みんなが運動場で鉄棒にぶらさがったり、
棒かくしをしたりしていますと、少し遅れて佐太郎が何かを入
れたさざる箆ざるをそつとかかえてやって来ました。

「なんだ、なんだ。」とすぐみんな走って行つてのぞき

込みました。

すると佐太郎は袖そででそれをかくすようにして、急いで学校の裏の岩穴のところへ行きました。そしてみんなはいよいよあとを追って行きました。

一郎がそれをのぞくと、思わず顔いろを変えました。

それは魚の毒もみにつかう山椒さんしよの粉で、それを使うと発破はっぱと同じように巡査に押えられるのでした。ところが佐太郎はそれを岩穴の横の萱かやの中へかくして、知らない顔をして運動場へ帰りました。

そこでみんなはひそひそと、時間になるまでいつまでもその話ばかりしていました。

その日も十時ごろからやつぱりきのうのように暑くなりました。みんなはもう授業の済むのばかり待っていました。

二時になつて五時間目が終わると、もうみんな一目散に飛びだしました。佐太郎もまた箆をそつと袖でかくして、耕助だのみんなに囲まれて河原へ行きました。三郎は嘉助と行きました。みんなは町の祭りのときのガスのようなにおいの、むつとするねむの河原を急いで抜けて、いつものさいかち淵ふちに着きました。すつかり夏のような立派な雲の峰が東でむくむく盛りあがり、さいかちの木は青く光つて見えました。

みんな急いで着物をぬいで淵の岸に立つと、佐太郎が一郎の顔を見ながら言いました。

「ちゃんと一列にならべ。いいか、魚さかな浮いて来たら泳いで行つてとれ。とつたくらい与やるぞ。いいか。」

小さなこどもらはよろこんで、顔を赤くして押しあつたりしながらぞろつと淵ふちを囲みました。

ペ吉だきちの三四人はもう泳いで、さいかちの木の下まで行つて待つていました。

佐太郎が大威張りで、上流の瀬に行つてざる笊をじゃぶじゃぶ水で洗いました。

みんなしいんとして、水をみつめて立つていました。

三郎は水を見ないで向こうの雲の峰の上を通る黒い鳥を見ました。一郎も河原にすわつて石をこちこちたたいていました。

ところが、それからよほどたつても魚は浮いて来ませんでした。

佐太郎はたいへんまじめな顔で、きちんと立つて水を見ました。きのうはっば発破をかけたときなら、もう十匹もとつていたんだとみんなは思いました。またずいぶんしばらくみんなしい

んとして待ちました。けれどもやつぱり魚は一ぴきも浮いて来ませんでした。

「さつぱり魚、浮かばないな。」耕助が叫びました。佐太郎はびくつとしましたけれども、まだ一心に水を見ていました。

「魚さかなさつぱり浮かばないな。」ペ吉がまた向こうの木の下で言いました。するともう、みんなはがやがやと言い出して、みんな水に飛び込んでしまいました。

佐太郎はしばらくきまり悪そうに、しゃがんで水を見ていましたけれど、とうとう立って、

「鬼っこしないか。」と言いました。

「する、する。」みんなは叫んで、じゃんけんをするために、水の中から手を出しました。泳いでいたものは急いでせいの立つところまで行って手を出しました。

一郎も河原から来て手を出しました。そして一郎ははじめに、きのうあの変な鼻のところがった人の上って行つた崖がけの下の、青いぬるぬるした粘土のところを根っこにきめました。そこに取についていけば、鬼は押えることができないというのでした。それから、はさみ無しの一人まけかちでじゃんけんをしました。

ところが悦治はひとりのはさみを出したので、みんなにうんとはやされたほかに鬼になりました。悦治は、くちびるを紫いろにして河原を走つて、喜作きさくを押えたので鬼は二人になりました。それからみんなは、砂つばの上や淵ふちを、あつちへ行つたりこつちへ来たり、押えたり押えられたり、何べんも鬼つこをしました。

しまいにとうとう三郎一人が鬼になりました。三郎はまもなく吉郎きちろうをつかまえました。みんなはさいかちの木の下の下にいてそ

れを見ていました。すると三郎が、

「吉郎君、きみは上流かみから追つて来るんだよ。いいか。」と言いな
ながら、じぶんはだまつて立つて見ていました。

吉郎は口をあいて手をひろげて、上流から粘土の上を追つて
来ました。

みんなは淵ふちへ飛び込むしたくをしました。一郎は楊やなぎの木にの
ぼりました。そのとき吉郎が、あの上流の粘土が足についてい
たために、みんなの前ですべつてころんでしまいました。

みんなは、わあわあ叫んで、吉郎をはねこえたり、水にはいつ
たりして、上流の青い粘土の根に上がつてしまいました。

「又三郎、来。」嘉助は立つて口を大きくあいて、手をひろげ
て三郎をばかにしました。すると三郎はさつきからよつぽどお
こつていたと見えて、

「ようし、見ているよ。」と言いながら本気になって、ぎぶんと水に飛び込んで、一生けん命、そつちのほうへ泳いで行きました。

三郎の髪の毛が赤くてばしやばしやしているのに、あんまり長く水につかってくちびるもすこし紫いろなので、子どもらはすつかりこわがってしまいました。

第一、その粘土のところはせまくて、みんながはいれなかったのに、それにたいへんつるつるすべる坂になっていましたから、下のほうの四五人などは上の人につかまるようにして、やつと川へすべり落ちるのをふせいでいたのです。一郎だけが、いちばん上で落ちついて、さあみんな、とかなんとか相談らしいことをはじめました。みんなもそこで頭をあつめて聞いています。三郎はぼちやぼちや、もう近くまで行きました。

みんなはひそひそはなしています。すると三郎は、いきなり両手でみんなへ水をかけ出しました。みんなが、ばたばた防いでいましたら、だんだん粘土がすべって来て、なんだかすこうし下へずれたようになりました。

三郎はよろこんで、いよいよ水をはねとばしました。

すると、みんなはぼちゃんぼちゃんと一度にすべって落ちました。三郎はそれを片っぱしからつかまえました。一郎もつかまりました。嘉助がひとり、上をまわって泳いで逃げましたら、三郎はすぐに追い付いて押えたほかに、腕をつかんで四五へんぐるぐる引っぱりまわしました。嘉助は水を飲んだと見えて、霧をふいてごぼごぼむせて、

「おいらもうやめた。こんな鬼つこもうしない。」と言いました。小さな子どもらはみんな砂利じやりに上がってしまいました。

三郎はひとりさいかちの木の下に立ちました。

ところが、そのときはもうそらがいつぱいの黒い雲で、楊やなぎも変に白つぽくなり、山の草はしんしんとくらくなり、そこらは何んとも言われない恐ろしい景色にかわっていました。

そのうちに、いきなり上の野原のあたりで、ごろごろと雷が鳴り出しました。と思うと、まるで山つなみのような音かして、一ぺんに夕立がやって来ました。風までひゅうひゅう吹きだしました。

淵ふちの水には、大きなぶちぶちがたくさんできて、水だか石だかわからなくなっていました。

みんなは河原から着物をかかえて、ねむの木の下へ逃げこみました。すると三郎もんだかはじめでこわくなったと見えて、さいかちの木の下からどぼんと水へはいつてみんなのほうへ泳

ぎだしました。

すると、だれともなく、

「雨はぎっこぎっこ雨三郎、

風はどっこどっこ又三郎。」と叫んだものがありました。

みんなもすぐ声をそろえて叫びました。

「雨はぎっこぎっこ雨三郎、

風はどっこどっこ又三郎。」

三郎はまるであわてて、何かに足をひつぱられるようにして淵ふちからとびあがって、一目散にみんなのところへ走って来て、がたがたふるえながら、

「いま叫んだのはおまえらだちかい。」とききました。

「そでない、そでない。」みんないつしよに叫びました。

ペ吉がまた一人出て来て、

「そでない。」と言いました。

三郎は気味悪そうに川のほうを見ていましたが、色のあせたくちびるを、いつものようにきつとかんで、「なんだい。」と言いました。からだはやはりがくがくふるえていました。

そしてみんなは、雨のはれ間を待って、めいめいのうちへ帰ったのです。

どつどど どどうど どどうど どどう

青いくるみも吹きとばせ

すっぱいかりんも吹きとばせ

どつどど どどうど どどうど どどう

どつどど どどうど どどうど どどう

先ごろ、三郎から聞いたばかりのあの歌を一郎は夢の中でまたきいたのです。

びつくりしてはね起きて見ると、外ではほんとうにひどく風が吹いて、林はまるでほえるよう、あけがた近くの青ぐろいうすあかりが、障子や柵たなの上のちようちん箱や、家じゅういっばいでした。一郎はすばやく帯をして、そして下駄げたをはいて土間をおり、馬屋の前を通つてくぐりをあけましたら、風がつめたい雨の粒といっしょにどつとはいつて来ました。

馬屋のうしろのほうで何か戸がばたつと倒れ、馬はぶるつと鼻を鳴らしました。

一郎は風が胸の底までしみ込んだように思つて、はあと息を強く吐きました。そして外へかけだしました。

外はもうよほど明るく、土はぬれておりました。家の前の栗くりの

木の列は変に青く白く見えて、それがまるで風と雨とで今洗濯せんたくをするだけでもいうように激しくもまれていました。

青い葉も幾枚も吹き飛ばされ、ちぎられた青い栗のいがは黒い地面にたくさん落ちていました。空では雲がけわしい灰色に光り、どんどんどんどん北のほうへ吹きとばされてきました。

遠くのほうの林はまるで海が荒れているように、ごんごんと鳴ったりぎつと聞こえたりするのです。一郎は顔いっぱい冷たい雨の粒を投げつけられ、風に着物をもつて行かれそうになりながら、だまってその音をききすまし、じつと空を見上げました。

すると胸がさらさらと波をたてるように思いました。けれどもまたじつとその鳴ってほえてうなつて、かけて行く風をみていますと、今度は胸がどかどかとなつてくるのでした。

きのうまで丘や野原の空の底に澄みきつてしんとしていた風が、けさ夜あけ方にわかにいっせいにこう動き出して、どんどんどんタスカロウ海溝かいこうの北のはじめをめがけて行くことを考えますと、もう一郎は顔がほてり、息もはあはあとなって、自分までがいっしょに空を翔かけて行くような気持ちになって、大急ぎでうちの中へはいると胸を一ぱいはつて、息をふつと吹きました。

「ああひで風だ。きょうは煙草たばこも栗くりもすつかりやらえる。」と一郎のおじいさんがぐぐりのところに立って、ぐつと空を見えます。一郎は急いで井戸からバケツに水を一ぱいくんで台所をぐんぐんふきました。

それから金かなだらいを出して顔をぶるぶる洗うと、戸棚とだなから冷たいごはんと味噌みそをだして、まるで夢中でぎくぎく食べました。

「一郎、いまお汗あせでできるから少し待つてだらよ。何なしてけさそつたに早く学校へ行がないやないがべ。」おかあさんは馬にやる（不詳）を煮るかまどに木を入れながらききました。

「うん。又三郎は飛んでつたがもしれないもや。」

「又三郎つて何だてや。鳥こだてが。」

「うん。又三郎つていうやづよ。」一郎は急いでごはんをしまうと、椀わんをこちこち洗つて、それから台所の釘くぎにかけてある油合羽あぶらがつばを着て、下駄げたはもつてはだしで嘉助をさそいに行きました。

嘉助はまだ起きたばかりで、

「いまごはんをたべて行くがら。」と言いましたので、一郎はしばらくうまやの前で待つていました。

まもなく嘉助は小さい簀みのを着て出て来ました。

はげしい風と雨にぐしよぬれになりながら二人はやつと学校

へ来ました。昇降口からはいつて行きますと教室はまだしいんとしていましたが、ところどころの窓のすきまから雨がはいつて板はまるでぎぶぎぶしていました。一郎はしばらく教室を見まわしてから、

「嘉助、二人して水掃ぐべな。」と言つてしゆる箒はらをもつて来て水を窓の下の穴あなへはき寄せていました。

するともうだれか来たのかというように奥から先生が出てきました。が、ふしぎなことは先生があたりまえの単衣ひとえをきて赤いうちわをもっているのです。

「たいへん早いですね。あなたがた二人ふたりで教室の掃除そうじをしているのですか。」先生がききました。

「先生お早うございます。」一郎が言いました。

「先生お早うございます。」と嘉助も言いましたが、すぐ、

「先生、又三郎きよう来るのすか。」とききました。

先生はちよつと考えて、

「又三郎つて高田さんですか。ええ、高田さんはきのうおとうさんといつしよにもうほかへ行きました。日曜なのでみなさんにご挨拶するひまがなかつたのです。」

「先生飛んで行つたのですか。」嘉助がききました。

「いいえ、おとうさんが会社から電報で呼ばれたのです。おとうさんはもいちどちよつとこつちへ戻られるそうですが、高田さんはやつぱり向こうの学校にはいるのだそうです。向こうにはおかあさんもおられるのですから。」

「何^なして会社で呼ばつたべす。」と一郎がききました。

「ここのモリブデンの鉱脈は当分手をつけないことになつたためなそうです。」

「そうだないな。やつぱりあいづは風の又三郎だったな。」嘉助が高く叫びました。

宿直室のほうで何かごとごと鳴る音がしました。先生は赤いうちわをもつて急いでそつちへ行きました。

二人はしばらくだまつたまま、相手がほんとうにどう思っているか探るように顔を見合わせたまま立ちました。

風はまだやまず、窓ガラスは雨つぶのために曇りながら、またがたがた鳴りました。

底本：岩波文庫『童話集 風の又三郎』

1951（昭和 26）年 4 月 25 日 第 1 刷発行

1967（昭和 42）年 7 月 16 日 第 24 刷改版発行

※底本の、「25 [#「25」は縦中横] - 12 [#「- 12」は縦中横] -
- [#「-」は縦中横] は「25 - 12 =」に、17 [#「17」は縦中
横] × 4 [#「× 4」は縦中横] - [#「-」は縦中横] は「17 ×
4 =」に、それぞれ置き換えました。

入力：柴田卓治

校正：野口英司

1998 年 11 月 5 日公開

2004 年 3 月 26 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。